

三省堂 国語教育

ことばの学び

a new way of learning Japanese



特集 習得・活用の学びを拓く

vol.

18

おすすめの本

2008年度に各賞を受賞した
児童図書をご紹介します。

第13回・日本絵本賞 (毎日新聞社・(社)全国学校図書館協議会)

大賞



『よしおくんがぎゅうにゅうをこぼしてしまったおはなし』

及川賢治、竹内蘭子 作・絵、岩崎書店
ある朝のこと、牛乳をこぼしてしまったよし
おくん。どくとくと流れだした牛乳が……。

読者賞



『ふしぎなキャンディーやさん』

みやにしたつや 作・絵、金の星社
ふしぎなキャンディーをなめたバタくん
は、ふしぎな力が身について……。



絵本賞

『悪魔のりんご』

舟崎克彦 作、宇野亜喜良 画、小学館
お母さんとはぐれてとほうにくれている
少女のまえに、おなかをすかせた悪
魔があらわれました……。



絵本賞

『ふってきました』

もとしいつみ 文、石井聖岳 絵、講談社
お花をつんでいたつるこちゃんの前
にあらわれたのは大きな“わに”、そし
て……。



絵本賞

『ぼくがラーメンたべてるとき』

長谷川義史 作・絵、教育画劇
ぼくがラーメンたべてるとき、となりで
ミケがあくびして、そのとなりのみつ
ちゃん……。



第48回・日本児童文学者協会賞
(日本児童文学者協会)

『そのぬくもりはきえない』

岩瀬成子 作、偕成社

小学校4年生の波は、近所の家から
犬の散歩を頼まれます。彼女は、そ
の家で、そこにいるはずのない不思
議な男の子、朝夫と出会い……。



『猫町五十四番地 一間中ケイ子詩集』

間中ケイ子 著、てらいんく

「初雪」「冬の猫」「おひなさま」
など66編の詩が紡ぐ季節の移ろい、
小さな発見。



第41回・日本児童文学者協会
新人賞(日本児童文学者協会)

『幸子の庭』

本多明 作、小峰書店

幸子の家には、東京には珍しく広い庭
がある。それは、曾祖母が大切に
手入れし、思いをこめて造った庭だっ
た……。

ことばの学び

三省堂 国語教育

a new way
of learning
Japanese



vol. 18

CONTENTS

- 2 巻頭エッセイ つなぎたい ことば こやま 峰子

特集 習得・活用の学びを拓く

- 4 学習活動としての習得・活用 高木 展郎
8 算数の豊かな学びを支える「説明」 清水 静海
10 「空気カー」を使った発展学習 ―理科からの提案― 唐戸 嘉一
12 習得・活用の学習を实践から考える ―国語科からの提案― 阿部 藤子

実践交流

- 14 小学国語 「思考の場」づくりで「活用型」読解力を育てる
～一年「いろいろなふね」「はたらくじどう車」の实践から～ 香月 正登
16 小学国語 子どもと読み味わう詩の授業（三～六年）
「雲」（山村暮鳥） 村田 明
18 小学国語 関係づけて読む力を育てる説明文指導
―論理的な思考力の育成を目指して― 馬場 雅也
20 小学国語 スピーチを楽しくする 10 の技術 菊池 省三
22 小学国語 人物の考え方や生き方をとらえよう
―「わらぐつのなかの神様」（小学五年）― 泉 真
24 中学国語 意欲・関心を高め、活用力を育む古典の授業デザイン
―「おくのほそ道」（三年）の实践から― 森 喜世子
26 中学書写 国語科書写の評価について
―学年行書指導から考える 関根 克洋

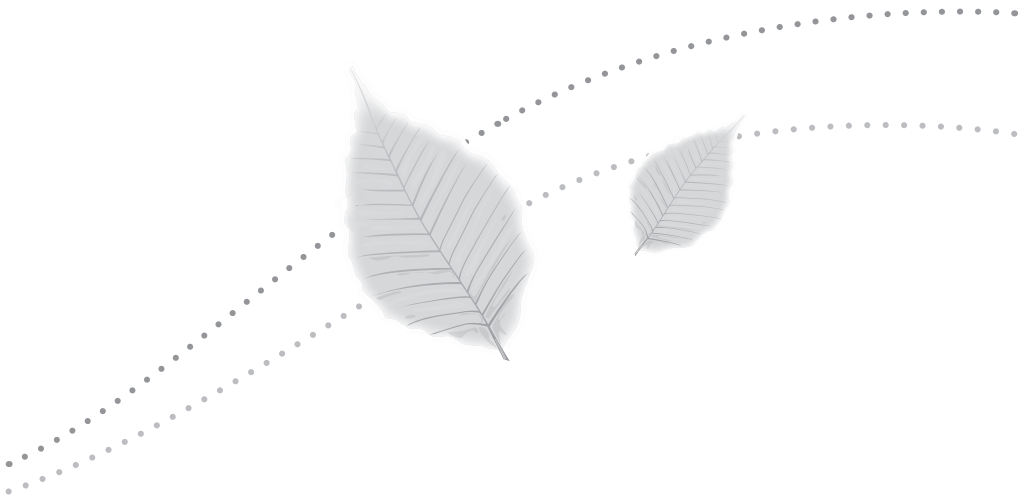
- 28 読解リテラシーと読書指導 第1回 主題・要旨をとらえるということ 足立 幸子
30 ことばが辞書に入る瞬間^{とき} 第4回 子どもの変化に即応した新しさを
―第四版改訂作業から 近藤 章
32 話力・和力・輸力 第1回 ユーモアは、相手の肯定、人間の肯定 高橋 俊三

- 33 編集後記

表紙イラスト
安村 彩

つなぎたい ことば

こやま 峰子



人と人は、ことばで心を通わせることができる。けれど重宝し使っていたカップやソーサーを不注意にも手をすべらし壊してしまったとき、共通のことばがないことに気づき、戸惑う。

「ゴメンナサイ。ナガイアイダ、ゴクロウサマ。ソシテ、アリガトウ」と一人、届かないかも知れないことばを呟く。かけらを拾いながら、彼等からのことばを、ひたすら待つ。互いに異次元に暮らすもの？ 同志の交信はポエティックな精神が頼みの綱。

この地球にはバッタ、モグラ、蜜蜂、小鳥など多くの生物が生きているが意思疎通は難しい。難しいけれど不可能ではない。つなぎたい思いが不可能を可能に変える。そして、つなぎたい願望と想像力が詩や童話を初め多種の作品を生み、文化を形作ってきた気がする。文学の始まりは、つないでみたい心から出発した気がする。それぞれの伝えたい対象によって民話、寓話、物語、小説などのジャンルに枝分かれしていったのでしよう。

フランスの哲学者アラン（本名はエミール・オーギュスト・カルティエ、一八六八〜一九五二）は人間にとつて「大切なものは童心や若さであり詩である。これを忘れた人はみすばらしい。悲しいかな、そのまま老いてしまうほかはない」と語っている。「薬用植物を研究するにしても、同時に木をとりまく妖精たちの見えない姿を追う一瞬のきらめきをもつべき」と『信仰について』のなかで述べている。

こやま みねこ 詩画集『地雷のあしあと』（小学館）は出版され5年経過したが現在もボスニア・ヘルツェゴビナの子どもたちが描いた絵が全国巡回中。11月は北海道芸術高校、2009年1月『地雷のあしあと』合唱コンサート、4月も音楽会を開催。

おしつけがましくなく、詩的なことばで子どもや大人に作品を届けられたら、ことばは、つなぎたい相手の心の湖で小魚のように、びちびちと息づき、作者の思想は普遍性をもち泳ぎだすにちがいありません。作者の想いを背負った登場人物や動物などが物語のなかで健気に動きまわる姿に読者は明日の光を見いだし、勇気づけられ、新しい一歩を踏みだすこともあるでしょう。

私は思う。頼りなげであっても、宇宙に小石を投げられるようにみえない相手に夢を投げかけて見たい衝動にかられるときがある。そのようなときに生れた作品は冒険的すぎて誰からも振り向かれないであろう故、編集者にもせる勇氣はもちあわせていない。心のむくままの創作の話はさておき、時代の風にも耐え抜き人の心に根をおろし育つていく作品には詩情と同時に厳然たる真実も必要な気がする。

サンIIテグジュペリの作品に多くの読者が魅せられる大きな理由は事実を事実として前面に押し出すのではなく文学的オブラートに包みつつ伝えていく思想が核としてあるのではないのでしょうか。世界中の読者をさりげなく説得していく魅力……魔力のまえでは頭を下げるのみ。

『星の王子さま』はサンIIテグジュペリがアメリカ、ニューヨークに亡命中に執筆された。ある日、レストラの紙ナフキンに描いた落書きを出版社のレイナル&ヒッチコック社社長がみて、子ども向けのクリスマス

作品として創作を依頼し、一九四三年に出版される。フランスではサンIIテグジュペリが消息をたち、第二次世界大戦が終結した次の年、刊行された。その後は世界百四十以上の言語に翻訳され累計二千万部以上の売り上げに伸びていく。『聖書』、マルクスの『資本論』につぐ世界的なベストセラー。

飛行家サンIIテグジュペリは第二次世界大戦の末期、一九四四年七月三十一日、偵察飛行に出撃したまま、行方不明になってしまう。最後の飛行場はナポレオンの生れた地中海に浮ぶコルシカ島のバスディアにある。ジェノバ統治時代の面影が残る町の飛行場を訪れたのは一九九七年の秋。日本からニースに向かい、そこで小型機に乗換え、バスディアの飛行場に降りた。飛行場に立ったとき、潮風が鼻の奥をツーンと刺したことは今も忘れられない。サンIIテグジュペリは、この飛行場を最後に何処かに消えてしまった！ というおもいが旅人の気持ちを感じたことは記憶に鮮やかに残っている。あのと潮風が、耳元でささやく。「大切なことは目に見えないんだよ……心でさがさないとね」

アランもサンIIテグジュペリも心に重きをおいている。現代のように寒々しい事件ばかりが起きていくときこそ、このような作品が多くの人に読まれることは期を得ているのかもしれない。救いの書として。

習得・活用の学びを拓く

「習得」「活用」の学びとは何か、
国語科と他教科での連携を考えながら、これからの課題を追いました。

学習活動としての習得・活用

横浜国立大学

高木 展郎

1 学力の重要な要素

新しい学習指導要領が、平成20年3月に告示された。その中で、「第1章 総則 第1教育課程編成の一般方針」「1」では、これから求められる学力について、次のように示されている。

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童（生徒）に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生か

した特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童（生徒）の発達の段階を考慮して、児童（生徒）の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童（生徒）の学習習慣が確立するように配慮しなければ

ならない（小学校学習指導要領 p13、中学校学習指導要領 p15）。

ここでは、これからの時代に求める学力の重要な要素として、第一に、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得すること。第二に、習得したことを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむこと。第三に、主体的に学習に取り組む態度を養うこと（学習意欲）が指摘されている。

さらに、これらのことを保証するために、言語活動の充実を図ることを述べている。

2 活用という用語の定位

「習得」「探究」という用語が文部科学省関係で初出したのは、中央教育審議会『新しい時代の義務教育を創造する（答申）』（平成17年10月26日）である。その序章には、次のように示されている。

○ 現行の学習指導要領の学力観について、様々な議論が提起されているが、基礎的な知識・技能の育成（いわゆる習得型の教育）と、自ら学び自ら考える力の育成（いわゆる探究型の教育）とは、対立的あるいは二者択一的にとらえる

べきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要である。

右記には、「活用」という用語は用いられていない。「活用」という用語が用いられたのは、中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 審議経過報告（概要）（平成18年2月13日）で、以下のように示されている。

2 教育内容等の改善の方向

(1) 人間力の向上を図る教育内容の改善

① 基本的な考え方

い確かな学力の育成

○ 知識・技能と考える力を総合的に育成することが必要。

○ ① 基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させることを基本としつつ、② 知識・技能を活用する力を重視し、③ 課題探究活動を通じて、自ら学び自ら考える力を高めることが重要。

しかし、右記では「活用する力」となっており、後述するような学習活動としての「活用」ではない。

習得・活用・探究として併記されたのは、

中央教育審議会教育課程部会『第3期教育課程部会の審議の状況について』（平成19年1月16日）からである。ここでは、「活用」は、次のように取り上げられている。

○ 基礎的・基本的な知識・技能の育成（いわゆる習得型の教育）と自ら学び自ら考える力の育成（いわゆる探究型の教育）とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成する具体的な方策を示すことが必要である。

このため、いわば活用型の教育ともいえるべき学習を両者の間に位置付ける方向で検討を進めている。

○ すなわち、① 基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させることを基本とする。② こうした理解・定着を基礎として、知識・技能を実際に活用する力の育成を重視する。さらに、③ この活用する力を基礎として、実際に課題を探究する活動を行うことで、自ら学び自ら考える力を高めることが必要である。このような過程を各教科等に即して具体的に検討している。

ここでは、「習得型の教育」と「探究型の

教育」との間に「活用型の教育」という具体的な過程をおくことによって、次のようなことを行う方向性を示した。

これらの知識を活用し、探究型の学習へと発展させる観点から、これまで必ずしも具体的な過程が明確ではなかった思考力や表現力の育成などを各教科等において相互に関連付けながら図る具体的な方法を、例えば次のように検討している。

① 日常生活に必要とされる技能としての対話、記録、要約、説明、感想などの言語活動を発達の段階に応じ体系的・継続的に指導、読書活動を充実（国語等）

② 言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを用いて説明・表現する指導の充実（算数・数学）

③ 科学的な思考力・表現力の育成を図る観点から考察・説明・探究を充実するとともに、観察・実験や自然体験、科学的な体験を一層充実（理科）

右記の、中央教育審議会教育課程部会『第3期教育課程部会の審議の状況について』（平成19年1月16日）では「習得型」「活用型」「探究型」という「型」をつけているが、これ以

降の文部科学省から出ている文章では、「型」をつけていない。

この習得・活用という用語が定位したのは、平成20年6月に改定された学校教育法であり、その第三十条二項（第四十九条で、中学校に準用）において、法律として示された。このことは、学力の内容について、法律で示されたと言うことでもある。

3 習得・活用の意味

習得は、学校教育法にも示されているように、基本的・基礎的な知識・技能を習得するところに意味がある。この基本的・基礎的な知識・技能とは、学習指導要領の指導事項（内容）に示されているものを対象としている。ミニマムエッセンシャルとしての学習指導要領には、基本的・基本的な内容が示されている。従って、この基礎的・基本的な知識・技能は、各教科や領域の内容を指している。よく、基礎・基本を「読・書・算」とすることがあるが、学校教育における基礎的・基本的な知識・技能は、学習指導要領の指導事項（内容）であることを確認しておきたい。

活用は、「うまく使うこと」（大辞林）という意味で、習得と活用との関係でいうなら、習得したことを使うことである。しかし、単に使うとなるとさまざまな使い方があ

る。活用は、意識して使う、ということに意味がある。

また、使うことの中に、単に右にあるものを左に移して使う、こともあるが、ここで言う活用は、単に移して使うという作業的な意味ではない。言い換えると、習得したことを機能させることが活用である。

活用は、学校教育法では「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ」と示されている。ここでは、習得と活用とを「とともに」ということばでつないでいる。

この「とともに」ということは、辞書的な意味では「と同時に」（大辞林）ということである。従って、習得と活用との間には、習得してから活用ということもあれば、活用を図ることを通して習得することもあり、そこには順序制や段階制は存在しない。

4 学習活動としての習得・活用

習得と活用とは、学力や能力ではない。習得力とか活用力、さらに、習得能力、活用能力ということが言われるが、それは新しい学習指導要領では触れられていない。新しい学習指導要領では、習得と活用とは、学習活動として位置づけられている。そのことは、下

記に示されていることから明らかである。

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2 以上のほか、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 各教科等の指導に当たっては、児童(生徒)の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童(生徒)の言語活動を充実すること。
(学習指導要領 総則)

右記には、「活用を図る学習活動」となっている。活用は、学習活動であり、それを通して学力・能力としての思考力、判断力、表現力を育成することが求められている。

さらに、そのことと同時に、「児童(生徒)の言語活動を充実すること」が述べられている。この言語活動の充実、教科国語のみではなく総ての教科・領域、学校生活全体で行うことが新しい学習指導要領に示されている。

5 習得・活用の学びを拓く

新しい学習指導要領の解説(総則編)には、左記のような記述がある。

新しい学習指導要領についての中央教育審議会答申(平成20年1月)は、知識・技能の習得や活用、探究について次のように提言した。

・ 教科では、基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、観察・実験をし、その結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で、知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を行い、それを総合的な学習の時間における教科等を横断した課題解決的な学習や探究活動へと発展させることが必要である。

・ これらの学習活動は相互に関連し合っており、截然と分類されるものではないが、知識・技能を活用する学習活動やこれらの成果を踏まえた探究活動を通して、思考力・判断力・表現力等がはぐくまれる。

・ 各教科での習得や活用と総合的な学習

の時間を中心とした探究は、決して一つの方角で進むだけでなく、例えば、知識・技能の活用や探究がその習得を促進するなど、相互に関連し合って力を伸ばしていくものである。

ここには、学習活動として学習指導要領に示されている各教科の指導事項(内容)の習得を行うこととともに、それらを活用することが求められている。学校教育においては、各教科の授業の中で習得と活用とが具体化されなくてはならない。それは、学習活動としての各教科等における言語活動の充実を通して行われる。

このことを具体的な授業の活動として行うのが、学習者による「説明」である。学習者自身に学んでいることを説明させることにより、学びをメタ認識させることができる。新しい学習指導要領の総則には、次のような事項が示されている。

(4)各教科等の指導に当たっては、児童(生徒)が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。(第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項)

学習を振り返ることによって、自己の学習を相対化し、自覚化を通して学習の意味を再確認することが重要となる。説明をすると言うことは、この学習の自覚によって行われる。説明を行うときに最も重要なものが、学習者自身に「分からない」ことを、ことばによって説明させることである。「分からない」ことをことばで説明することは、「分からない」ことを意識することでもある。

学習者自身に学びを対象化させ、学びの内容をことばで説明させることによって、自身の学びを認識し、自己評価させることになる。このことを別な言い方をすれば、自己の学びを意識し、学びの内容を自覚することでもある。ここに、活用という学びがある。

「習得・活用の学びを拓く」とは、「習得・活用」という言語活動という学習活動を通して、これからの時代に求められる学力としての思考力・判断力・表現力の育成を図る授業を創出することである。そのことを具現するためにことばを通して「考える」ことを基軸にした学習が、行われなくてはならない。

たかぎ のぶお 横浜国立大学教育人間科学部教授。国語科教育、教育方法学専攻。授業研究や学校評価を通して、これからの時代の授業を考えている。

算数の豊かな学びを支える「説明」

筑波大学
清水 静海

ある事例

下の図は、小学校第四学年で正方形や長方形の面積を学習した後に、それらを活かして発展的に考える場面でのある子どもたちの反応とそれに対して教師により付されて○印である。この○印（中央）は、何に付けられた○であろうか。多くの子どもは、面積の20cm²（右下の○印）に付けられたものと思うであろう。これからの新しい教育の方向から見て、他に三つの○印が付される必要がある、それらは一層重要な意味を持つものである。一つは、左下の○印である。この式にはケアレスマス（4+2）が含まれ、4×2と改める必要がある。しかし、面積の20cm²をどのように導いたのかその方法、さらにはその答えでよい根拠を算数・数学の言葉「式」を用いて簡潔に示している。いま一つは、右側の○印である。これは、○印の式を見出した着想、ア

イデアを示しており、創造的な活動をする際に最も参考となる重要な情報である。最後は、はじめの○印（中央）であり、与えられた条件をどのように使用したのかを分かりやすく整理して示していることである。

この事例は、問題解決の成果をどのように記述し、まとめるかについてよい典型を示している。すなわち、与えられた情報を分類整理し（中央○）、解決の計画についての着想を示し（左○）、それに基づいて解決を実行し、その手順及び結果の正しさを示し（右○）、結論（○）を述べている。このように、問題解決の成果については、基本的にこれら四個の○が付されるようまとめ方を工夫することがもっと強調されるべきである。いずれも、算数の学びだけを支えるだけでなく、より広く学び一般を支える重要な要素であるとも言える。

問題 図のような形の面積を求めよう。

① どのように工夫すれば面積が求められるか考えよう

ここに
たりない
部分を
つけなお
すよ

$7 \times 4 - (4+2) = 7 \times 4 - 8 = 20$ 答え 20

言語観の拡張

中央教育審議会答申（平成20年1月）では、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、教科領域を横断して重視すべき学習活動の典型を六個例示している。いずれにも言語力が必要である。とりわけ、「概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする」、「情報を分析・評価し、論述する」及び

「課題について、構想を立て実践し、評価・改善する」ことについては、平成19年度より実施されている全国学力・学習状況調査のB問題、いわゆる「主として『活用』に関する問題」の作成の根拠ともなっている。また、いずれも、告示された小・中学校学習指導要領に色濃く反映されている。

このことに関連して、「これらの能力の基盤となるものは、数式などを含む広い意味での言語であり、その中心となるのは国語である」とし、さらに、「だからといってすべてが国語科の役割というものではない」として、言語観が拡大されていることである。特に、「数式などを含む広い意味での言語」として、言語観の拡張の象徴として「数式」が例示されたことは画期的である。今回の改訂では、国語科及び算数・数学科は生活や学習の基盤として位置づけられ、そのことが、算数・数学科の言語としての役割の強調に反映されている。したがって、「説明」を機軸として、国語科との一層密接な連携が必要になると考える。

説明する力をはぐくみ活かす

説明は、自身の納得と他者の説得のためだけでなく、考えや思いを伝え合い、それらを共有するとともに高め合ったり深め合ったり

するためにも必要である。よりよい説明をするためには、少なくとも二つの「なぜ」を明確にする必要がある。すなわち、「着想や方法に気づいたきっかけや動機を明らかにするなぜ」と「根拠となることを明らかにし、それに基づいて述べるなぜ」である。冒頭の事例は、これらの「なぜ」に簡潔に応えるものである。また、伝え合いや高め合いがよりよくできるためには、もう一つの「なぜ」、すなわち、「質問したりコメントをしたりする理由を明らかにするなぜ」にも配慮する必要がある。いずれにも言語力が必要であり、また、いずれも言語力を鍛える機会となり、言語のはたらきについて実感するよい機会ともなる。説明のもつはたらきを理解し、それを生かそうと積極的に取り組むよう子どもを導く必要がある。たとえば、説明は、より簡潔、明瞭かつ的確なよりよい説明を導いてくれる契機を与えられる、また、既習のことと新しいことを結び付けてくれる、さらに、考えを深めたり広げたりしてくれる、いずれも説明のもつ重要なはたらきである。平成19年8月の言語力育成協力者会議報告書案で、「他者とのコミュニケーションに関すること」の中で、「人々の共同生活を豊かにする」視点から、「個々人が他者との対話を通して考えを明確にし、自己を表現し、あるいは他者を理解し、

他者と意見を共有し、お互いの考えを深めていくことが望まれる」とともに、「対話すること、議論することを通して、自分の思考・理解が深まり新たな発想が生まれるという実感、他者とかかわりながらよりよく問題解決をする楽しさが味わえるという意識を培うことが望まれる。」としている。いずれにも、言語力が深くかわり、いずれも算数の学びに深くかわり、国語科との強固な連携により子どもたちの豊かな学びを実現したいものである。



しみず しづみ 筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授。算数・数学学習の質的な充実に関心をもち、各層からの算数・数学教育への期待にいかに対応するかについて思いをめぐらせています。

「空気カー」を使った発展学習 —理科からの提案—

神奈川県川崎市立中原小学校

唐戸 嘉一

往復運動する習得と活用

閉じ込めた空気を圧縮すると、かさは小さくなるが押し返す力は大きくなることを調べるときには、空気鉄砲を用いる方法が一般的であろう。

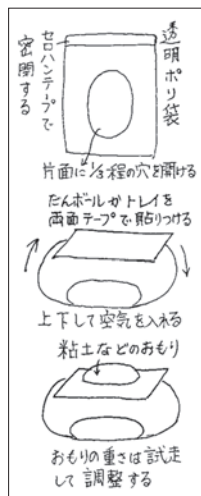
子どもたちが、最も喜ぶ実験の一つであり、子どもたちは夢中になって遊ぶ。そして、弾の詰め方や力の加え方を変えたりしながら、空気の性質を学んでいく。これは実験を通して知識・技能を習得するとともに、それを空気鉄砲の弾の飛ばし方に活用していくことで、習得した知識・技能をさらに確かなものにしていくのであり、習得と活用との間の往復運動が活発に行われている学習であるといえよう。

発展としての空気カー作り

一通り空気鉄砲を用いて学習した後、発展

学習として「空気カーを作ろう」(※)という学習に取り組ませてみた。

空気カーの作り方はきわめて簡単である。



このとき、下に穴をあけたもの他にも一つ、穴をあけないものも作っておく。二種類の空気カーを実際に滑らせて見ると、穴のあいた空気カーの方がよくすべると、また、上に乗せるおもりを重くすると、さらによくすべる。

自分の考えを説明する

ここまでの実験を全員で行った後、次のような活動を行わせた。



①「穴のあいている空気カーはなぜよくすべるのか」、その理由を考え、ノートにまとめる。

(この時、なるべくイメージ図を書くよう指示した。図や資料を用い、説得力のある話し方を心がけさせたいと思ったからである。)

②各自の考えを発表し合い、話し合う。その

際、なるべくイメージ図などを用いながら説明する。(この活動のことを考えた場合、イメージ図は画用紙などに書かせるべきであった。ワークシートに書かせたため、十分な活用が図られなかったが、黒板に新たにイメージ図を書き直して説明する児童もいた。)

なお、穴のあいている空気カーの方がよくする理由については、次のような意見が出された。

A 穴があいている方が空気カーが軽くなるのではないか。

B 穴からもれる空気が空気カーを押し回すのではないか。

C 空気の押しもどす力が逆に働いて、空気カーが少し浮くので滑りやすくなっているのではないか。

③話し合いの後、その結論を確かめるために再実験を行う。(一度で確かめられたわけではない。粘土を重くしすぎたためにかえって動かなくなったり、おもりの重さが僅かしか違わなかったため差が出なかったりといったこともあったが、何度か条件を変えたりして実験していくうちに縮められ

た空気が戻ろうとする力を確かめることができた。)

④予想から結果に至るまでのプロセスを文章でまとめさせる。(理科では特に、メタ認知能力の育成という観点から、見通しを立てたり振り返ったりする活動が重視されている。そこで、ただ実験の結果についてまとめさせるだけでなく、予想からまとめまでの一連の流れを記述させるようにしている。)

筋道を大切に

ふわふわしたポリ袋の手ごたえを通して、子どもたちは、確実に空気の存在を意識した。そして、穴のあいた空気カーがよく動くという事象を通して、空気が押し返す力を実感的にとらえることができた。この学習で学んだことは、今後中学校において摩擦についての学習する際にも役立つものと思われる。

発展的に扱った「空気カー」の学習だけでなく、単元全体を通して、見通しを立てることと振り返ることを重視するとともに、それを言葉で説明したり文章にまとめたりする活



動を取り入れるように心がけた。筋道立てて話したり書いたりすることで、学習したことへの認識が深まるとともに、言語力の育成にも役立つのではないかと考えたからである。

(※空気カーについては、川崎市青少年科学館の先生に教えていただきました。詳細は『青少年のための科学の祭典2002』に掲載されています。)

からと よしかず 川崎市立小学校理科教育研究会 常任委員。勤務校で「生きてはたらくことばの力を育てるカリキュラムの創造」に取り組んでいます。

習得・活用の学習を実践から考える —国語科からの提案—

お茶の水女子大学附属小学校
阿部 藤子

1 「習得・活用」の学習とは

二〇〇八年、中教審の答申が出されて以来、「習得・活用」の学習について様々な論考や実践が紹介されている。私は、何か新しいことをしようとするのではなく、これまで自分がしてきた実践を「習得・活用」の視点からとらえ直して、そこから始めるべきではないかと思う。

例えば、意見文を書く学習で、基本的な意見文の構成の仕方を知り、根拠を挙げて考えを書く学習をしたとする。これは、意見文の基本的な書き方を「習得」する学習と言えるだろう。この学習をふまえ、あるテーマについて根拠を挙げて反論し紙上討論をする、という学習は、「活用」に当たると言えるだろう。「習得・活用」は、それぞれがある一時間の授業、あるいは単元ではつきり分かれるわけではない。どちらも双方向で行きつ戻りつし行わ

れているというのが実際ではないだろうか。

授業で大切にしたいことは、

- ・身につけさせたい力を明確にする。そのための学習材、学習方法を工夫する。
 - ・「習得」においても、知識、技能を教え込むというより「受信する↓考える↓発信する」ことを行いたい。
 - ・友達との関わりを大切に、学び合う学習にすること。
- と考えている。

2 実践例1 (小1)

ことは遊び絵本からことばを広げる学習

〔絵本〕『くりくり』

(ひろかわさえこ 作・アリス館) より

①単元について

『くりくり』は、「くりくり」ということば(ゆくり、ずんぐり、びっくり等)で主人公の「くりくり」という栗の様子を表し、短いストー

リーになったことは遊び絵本である。擬態語・擬音語で人物の様々な様子を表せるおもしろさがあり、テンポよくリズムに乗って話を楽しめる作品である。

この絵本を元にして、

- ・語彙の拡充
- ・経験したことばにことばをつなげ、お話作りを楽しむ。

この二点をねらいとして学習を行った。

② 学習指導計画(6時間扱い)

- ・「くりくり」のことばを集めをする。絵本『くりくり』の読み聞かせを聞く。(1時間)
- ・「どんなふうのことば」(擬態語・擬音語)を集めてみる。(1時間)
- ・集めたことばを使って遠足のときのうたを作り、本作りをする。(3時間)
- ・発表会を行い作品を読み合う。(1時間)

3 実践例2 (小1)

絵本から想像の世界を広げる学習

〔『きよだいな きよだいな』〕

(長谷川摂子 作・降矢なな 絵
福音館書店 子どものとも) より

①単元について

『きよだいな きよだいな』は、「あったとき、あったとき ひろい のつばら どまんなか」という語りかけから始まり、広い野原で

百人の子どもたちが空想の世界で遊ぶ、様々な場面をリズムに乗せて語っていく物語である。前述の『くりくり』でのリズムをからだに刻み楽しむ学習をふまえ、この作品では、
・発想のおもしろさに気づき、空想を広げる楽しさを体験する。

・リズムに乗って創作し、イメージしたことをことばで表す。

ことをねらいたいと考えた。

②学習指導計画（14時間扱い）

・大きくなる話を集め、いろいろなお話を読む。（2時間）

・絵本『きよだいなきよだいな』を読み、学習の見通しを持つ。（おはなし作りをしよう・スーパービッグブックを作ろう）

・『きよだいなきよだいな』のおもしろいところを話し合う。（2時間）

・お話を作りグループ内で紹介し合う。（5時間）

・各自の本作りとスーパービッグブックを作り、発表会を行う。（5時間）

*絵を描くなどは「なかま」（生活科）の時間に行く。

③学習の様子と考察

子どもたちは、休み時間にも「あつたときあつたとき」を口ずさみ、体を揺さぶりながらこのリズムを楽しんだ。

この学習の最初に『きよだいなきよだいな』をビッグブックで読み聞かせたことから、子どもたちはその大きさに喜び、自分たちでもっと大きなスーパービッグブックを作りたいと言いだした。自分たちの作った空想のお話で大きな本を作る計画になったのである。



あつたとき あつたとき
ひろい のつばら どまんなか
きよだいなえびが あつたとき
こどもが40人やつてきて
えびのひげにぶらさがった
そしたら えびが 目をさまし
のしのしどすどす おつてきた
みんな きゃっきゃとにげたとき

右に、子どもの作品を載せた。この子どもが最初に考えたのは、「こどもが40人やつてきて」のあとは、「ぜんぶえびをたべたとき

いっぱいたべすぎて おなかがばんくしたとき」であった。教師は、「えびは子どもよりずっと大きいんでしょ。どんなことしたい？ 生きていたらどんな動きをするかな？」と巨大なえびが目の前にいたらどんな様子か想像してみようという気持ちでアドバイスをした。巨大な伊勢エビだろうか、上段のように、書き換えて持ってきた。原作にあるように、その巨大なものに子どもたちが大勢で関わって、とんでもないことが起こるといふ仕掛けにのせてお話をふくらませたのであろう。

一年生の国語の学習は、いわゆる言語事項の習得に多くの時間を費やす。しかし、低学年のうちに、たくさん日本語のリズムをからだに刻ませたいと思っている。そして語彙を広げ、自分の経験や想像をことばと結んで表現する学習こそが、この時期に必要な言語経験の積み重ねではないだろうか。重要なのは、何が「習得」でどこが「活用」かとすみ分けすることではなく、子どもたちにつけさせたい力を見極め、そのための学習材を工夫し、つけられた力をどう生かしていくか、ということを追求していくことだろう。

あへ ふじこ お茶の水女子大学附属小学校教諭。教科書のみならず、絵本、雑誌、新聞などから学習材を得て学習を組織したいと考え、日々実践し授業研究に取り組んでいます。

「思考の場」づくりで「活用型」読解力を育てる 〜一年「いろいろなふね」「はたらくじどう車」の実践から〜

山口県下関市立滝部小学校 香月 正登

一 「活用型」読解力を育てる

これまでの国語科における読解指導は、やはり文章の理解や確認に終始してきた感はない。また、「理解→表現」という関連指導の発想がなかったわけではないが、矢印が意味する「思考」への着眼が弱く、活動そのものへ目が奪われてきたことも読解力低下の一因だろう。

これから求められる「活用型」の読解力は、理解・確認を越えて、思考・表現を含む読解力として考えていかなければならない。批判的に読み、自分の考えを記述できる力、まさに、「思考し、表現する力」である。

二 教材化の工夫で「思考の場」づくり

例えば、説明文で、問いの文を空白にしてみる。子どもたちは、何が書かれているかを今まで以上に意識的に読むだろう。そして、答えの文を見つけ出し、それに合う問いの文

をつくる。物語で、異なったラストシーンを示してみる。それによって、どのような文脈の違いが生まれ、どちらが物語としておもしろいかを話し合う。そういう文学性にもふれることができる。

「思考の場」づくりとは、教材のもつ本質的な問いを浮上させ、相互の読みを高める教材への仕掛けである。あるものをなにと見たり、順序を入れ替えたり、視点を変えて読んだり、と多様な「思考の場」が考えられる。

三 単元「比べながら読もう」から

本単元は、比較を通して、文と文、段落と段落のつながりを見つけ、内容を確かに読むこと、さらに、そのつながりを活かして文章を書くことをねらう。教材は、「いろいろなふね」（東京書籍一年下）「はたらくじどう車」（教育出版一年下）で、総時間数十時間の単元である。

第一次 「いろいろなふね」を読もう！

① 「きゃくせん」と「フェリーボート」の文章を並べ替える。

② 「ぎよせん」と「しょうぼうてい」の文章を並べ替える。

③ 四つの船を比べながら読む。（授業Ⅰ）

第二次 「はたらくじどう車」を読もう！

① 四つの自動車の写真を読む。

② 「バス」と「きゃくせん」の文章を比較する。

③ 「コンクリートミキサー車」と「ロードローラー」の文章を書く。（授業Ⅱ）

④ 「ポンプ車」の文章を書く。

第三次 好きな乗り物の説明文を書こう！

① 「きゆうきゆうしゃ」を題材に説明文を書く。

② ③ 好きな乗り物を選んで説明文を書く。

(1) 「いろいろなふね」の「思考の場」づくりと授業

説明文「いろいろなふね」は、一読すれば、すつと内容が入りわかったつもりになる。では、そのつながりを崩してみよう。文章をバラバラにして、「きやくせん」の②～④段落を並べ替える。「フェリーボート」の⑤～⑦段落を並べ替える。「ぎよせん」「しょうぼうてい」を取り混ぜて、⑧～⑬を並べ替える。つなぎ合わせる作業はかなりの思考を要する。さらには、四つの船を比較し、「つくり」を入れ替えてみると、それぞれの船の特長が崩れ、「やくめ」「つくり」「はたらき」のつながりをより深く考えることができる。

授業Ⅰでは、まず、黒板に船の写真をはり、その下に「やくめ」の文章をばらばらにはる。すると、子どもたちは、「違う、違う！」の大合唱。写真と文章をあわせ、名前を確認する。次に、「やくめ」と同様に、「つくり」をあわせ、きやくせんとフェリーボートの「つくり」を入れ替えてみる。すると、また「ダメ、ダメ」の大合唱。そこで、「フェリーボートにもきやくしつやしよくどうががありますよ」と問う。子どもたちは、「やくめ」とのつながりをとらえて、「フェリーボートは人と車をはこぶから、車を入れるところの文じゃないとだめだ」と反論する。漁船の文章

を「さかなのむれをみつけるきかいやさかなを入れておけばしよがあります」と書き換えると、やはり、「やくめ」である「さかなをとる」とのつながりで反論する。最後に、「はたらき」を示し、船の仲間分けをさせる。いろいろな角度から船と船とのつながり、違いを見つけおもしろい。

C 客船とフェリーボートは、客室があったて、漁船と消防艇は働く船だよ。

C 消防艇は、客船とフェリーボートと漁船が火事になったら火を消しに行くね。

C 漁船で取った魚を、客船やフェリーボートの食堂で食べるんだよ。

(2) 「はたらきどう車」の「思考の場」づくりと授業

「いろいろなふね」で学んだ説明の観点を活かして、説明文を書くことを中心に学習を展開する。まずは、四つの自動車の写真から特長を見つけ、次に、「バス」の文章と「きやくせん」の文章を比較し、文型や接続語の効果を確認する。そこで、「コンクリートミキサー車」は、「つくり」の部分と、「ロードローラー」は、「はたらき」の部分と、「ポンプ車」は、「つくり」「はたらき」の部分とを空白にしておき、少しずつ難易度を上げ、適応範囲が広がっていくような「思考の場」をつくる。

授業Ⅱでは、「コンクリートミキサー車」

の「つくり」「ロードローラー」の「はたらき」を文章化する。「コンクリートミキサー車」では、「大きなミキサー」「たくさんノタイヤ」「広い窓」の三つを選択肢として設け、「しごと」と「つくり」の関係をはっきりさせて記述させる。文末を「あります」「ついでに」「のせています」のどれにするかも選択させたい。「ロードローラー」では、その「はたらき」を動作化させ、口頭作文をつくり、文に表す。ここでは、「くたりくたり」を取り上げ表現の方法として意識させる。

四 おわりに

「思考の場」づくりによって、子どもたちの学習意欲の高まりは顕著である。これまでのなぞりと確認の授業とは違い、子どもたちが思考する姿は格段に増え、相互のかかわりも深い。

「活用型」が意図するのは、学習の転移の問題である。読解から表現への学習展開の中で、思考の方法や着眼点を明らかにしたい。

かつき まさと 〈対話〉をキーワードにした国語科授業の実践研究に取り組んでいる。国語教育探究の会・中国支部のメンバーと切磋琢磨しながら研究を進めている。

子どもと読み味わう詩の授業(三〇六年) 「雲」(山村暮鳥)

大阪府羽曳野市立羽曳が丘小学校

村田 明

詩の授業は楽しい

ある研究会に参加して、初めてこの詩に出会った。

雲

山村暮鳥

おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきさうぢやないか
どこまでゆくんだ
ずっと磐城平の方までゆくんか

「じゃあ、その雲に届くように声をだして下さる。」

「この人は雲がうらやましいんですね。それではそのような気持ちで読んで下さい。」
といった教師の言葉で、子どもたちの読み声

がどんどん変わっていった。子どもたちが詩の世界へどんどん入っていったのだ。

この時、私は初めて詩を読み味わうことの楽しさを知った。それ以来、私は毎年この詩を授業している。

子どもたちと読み味わう基本として

(1) 言葉を調べる。

・ ゆうゆう (悠悠) はるかで限らないさま。
ゆっくりと落ち着いているさま。十分に余裕のあるさま。

・ 馬鹿に：とつても。すごく。

・ のんき (暢気、呑気、暖気) のんびりしていること。心配のないこと。

・ 磐城平 (いわきだいら) 福島県いわき市の地名。旧平市。現いわき市の一部。

(2) 作者について調べる。

〈山村暮鳥〉

・ 明治十七年 群馬県に生まれる。

・ 明治三十五年 キリスト教の洗礼を受ける。

・ 明治四十四年 福島県平町の講義所に転任。

・ 大正二年 第一詩集「三人の処女」を刊行。

結婚。

・ 大正七年 咯血して病臥。

・ 大正九年 茨城県に転居。

・ 大正十三年 十一月、詩集「雲」を校了。

十二月、永眠。

・ 大正十四年 詩集「雲」刊行。

(3) 私の読み

作者はどうして雲に呼びかけたのだろう。

どこから呼びかけたのだろう。また、どんな雲なのだろう。

作者は仕事で忙しかったのだろうか。手を休めてふと窓から外を見ると、青空に白い雲がゆっくりと流れている。いかにも『ゆうゆうと』『のんきさう』に見える。「いいなあ、お前は。のんきさうで。オレもお前のようになりたいよ。」と言いたかったのだろうか。

あるいは、作者は病氣だったのかもしれない。

い。病床から窓の外に流れる白い雲を見たの
 かもしれない。

いづれにせよ、作者は雲がうらやましかつ
 たのだ。

次に気になるのが、『磐城平の方までゆく
 んか』である。作者も磐城平に行きたいのだ
 ろうか。「いいなあ、お前は。オレも磐城平
 に行きたいよ。オレのかわりにオレの気持ち
 を運んでいってくれ。」と自分の気持ちを雲
 に託したのだろう。作者にとって大切な人が
 磐城平にいたのだろう。

子どもたちと読む計画

(1) 通し読みをする。

① 読めるかどうか、声に出して読んでみま
 しょう。

② 読めない字はありましたか。

・馬鹿に

・磐城平

③ 書き表し方がおかしいと思ったところは
 ありませんか。

・のんきさうぢやないか

・ずつと

④ すらすら読めるように繰り返し読みま
 しょう。

⑤ 意味のわかりにくい言葉はありません
 か。

・ゆうゆうと

・馬鹿に

・のんき

・磐城平

(2) 内容を想像しながら読む。

① どんな景色が思い浮かびましたか。

(学年によっては、「どんな雲が思い浮かび
 ました。」と聞いてもよい。)

・ 青空に白い雲がうかんでいる。

・ 大きな白い雲がぼっかりと浮かんで
 いる。

・ ゆっくりと動いている。

② では、その雲に呼びかけるように読んで
 みましょう。

③ 作者は、どうして雲に呼びかけたので
 しょう。

・ 雲が気持ちよさそうだったから。

・ のんびりしているから。

・ 自分も雲みたいなのんびりしたいと思っ
 たから。

・ 雲ののってどこかへ行ってみよう。

④ 雲がうらやましいのかな。そんな気持ち
 で読んでみましょう。

⑤ 雲がうらやましいと思う作者は、どんな
 生活をしているのでしょうか。

・ 仕事で忙しい。

・ 詩を書くのになかなか書けない。

・ 病気で寝ている（高学年では出てくるだ
 ろう）。

⑥ すると作者はどこで雲を見たのだろう。

・ 仕事しているとき窓から見た。

・ 詩が思いうかばなくて散歩しているとき
 見た。

・ 散歩の途中で川原で寝ころんだとき。

・ 病気で寝ているとき窓から見た。

⑦ 作者になったつもりで読んでみましょう。

※⑧ ところで、磐城平に何かあるのでしょ
 うか。（高学年では聞けるだろう。）

・ ふるさとじゃないかな。

・ お母さんがいるかもしれない。

・ 大切な友だちがいるのかな。

・ 会いたいけど忙しくて会えないから雲に
 託している。

・ 病気で行けないから雲に託している。

⑨ 今日学習したことを思いうかべながら読
 みましょう。

(この展開の仕方は、あくまでも参考の一つ
 に過ぎません。)

むらた あきら 子どもの学ぶ心と力を育む授業をめ
 ざして、国語を中心に実践研究を続けている。

関係づけて読む力を育てる説明文指導

— 論理的な思考力の育成を目指して —

岐阜県岐阜市立長良小学校 馬場 雅也

一 これから求められるもの

新学習指導要領の改訂及び解説が出された。「生きる力」をねらいとする学習指導要領の

知の側面「確かな学力」の重要な要素は、

①基礎的・基本的な知識・技能の習得②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等③学習意欲である。

しかし、現状の学力について、PISA調査、全国学力・学習状況調査等では、課題点が挙げられている。

このように、求められているものとその課題点に比べていくことが、これから最も重要になってくる。それが、『論理的な思考力の育成』である。そして、この『論理的な思考力』は、私が現在までに研究実践を進めてきた、『関係づけて読む力』そのものである。説明文教材の指導を通して、『関係づけて読む力』を育てていくことは、まさに『論理的な思考力』を育てることである。

二 願う子どもの姿

私は、次のようなたくましい子どもの姿を願い、実践を進めてきた。

言葉に立ち止まり、①言葉を具象化することを通して、語と語、文と文、段落と段落の内容を②関係づけて読み、書かれている内容や構成をとらえ、正確に内容を理解する姿

そして、私の「願う子どもの姿」が育つことで、子どもの『論理的な思考力』が育つと考える。

- ①言葉を具象化：「言葉に立ち止まり、その言葉の持つ意味、内容を文脈の中で具体的にイメージすること」
- ②関係づけて読む：「言葉に立ち止まり、その言葉の持つ意味、内容を文脈の中で理解していく（具象化する過程で、文内や文間、段落間などで、語と語、文と文、段落と段落の内容などをつないで考えながら読む）」

三 子どもの実態

今までの実践の中で、次のような子どもの実態が見られた。

○形式段落を意識して、文章を読み取ることが

できる。

○文章中から筆者が伝えようとする中心語句・中心文を意識して取り出し、文章を読み取ることが出来る。

○言葉に立ち止まり、言葉を具象化することで、語間・文間・段落間を関係づけて読もうとする。
●正確に語間・文間・段落間を関係づけ、筆者の伝えようとする事柄などを、文章から読み取っていくことに弱さが見られる。

●内容を拡散的に読むことで、断片的な内容の理解になることがある。

四 研究主題と仮説

研究主題

関係づけて読む力を育てる説明文指導

研究仮説

言葉に立ち止まり、言葉を具象化することによって、語と語、文と文、段落と段落の内容を『関係づけて読む力』が育ち、正確に書かれている内容を理解することができる。

五 研究の内容

1 指導内容の具体化と重点化

子どもの実態分析や現行の教科書教材の分析から、次のような指導内容の具体化と重点化を図った。

①関係づけて読む力の具体化と重点化

現時点で、『関係づけて読む力』を次の六点で整理し、指導内容を具体化するようにする。

- 「順序立てて」読む
- 「比較して」読む
- 「因果関係をとらえて」読む
- 「類別して」読む
- 「構造をとらえて」読む
- 「類推して」読む

特に、傍線の三つの力を重点として指導していくことで、他の『関係づけて読む力』も育てていけると考える。

②関係づけて読む段階

『関係づけて読む力』を育てるためには、子どもの実態や指導要領、教材分析から、次のような段階で指導していくことが大切であると考える。

- 低 ← 高
- 文内・語間関係
 - 文間関係
 - 文と段落間・段落間関係
 - 部分と文章全体との関係

2 関係づけて読む力を育てる指導の在り方

現在までの実践で、明らかになってきた指導の在り方について、次の点で整理をする。

①単位時間の学習過程

- ア 言葉に立ち止まる過程
具象化していこうとする言葉を明確にし、読みの足場を作る過程
- イ 具象化する過程
言葉用具象化することによって、語と語、文と文、段落と段落の内容を関係づけて読む、正確に内容を読み取る過程
- ウ まとめる過程
筆者の伝えたいことや主張が明確になるようなまとめを行う過程

②立ち止まる言葉を決め出す教材分析の視点

- ア その説明文教材では、どのような要旨・要点、知の獲得を生み出すか
- イ どのような『関係づけて読む力』が必要か
- ウ どの言葉の具象化を通して、関係づけて読むのか
- エ その言葉は、どのような意味や内容を持っているのか
- オ 実際に、どのように関係づけて読む思考を働かせるのか

③関係づけて読む思考を働かせる活動

- 生活経験と結びつけて
- 実際の事柄と結びつけて
- 既習語に置き換えて
- 挿絵・図と結びつけて
- 既有知識と結びつけて
- 身体をつかって表現して
- ペープサートを操作しながら説明して
- 絵や図にかいて
- 文図にして
- 文脈の中で評述されている言葉と結びつけて
- 文脈の中の別の言葉と結びつけて

七 まとめ

説明的文章に子どもたちが出会い、その中で新たな知の獲得をしていく喜びこそ、子どもたちの読む目的であろう。しかし、今後、自らの力で読み進めるためには、以上に述べた力が必要になってくると考える。その力をつけるための指導内容・指導の在り方について実践を踏まえ、より明らかにしていく必要がある。

ばば まさや 岐阜県岐阜市立長良小学校教諭。個人研究テーマ「関係づけて読む力を育てる説明文指導」を掲げ、研究実践を進めている。

スピーチを楽しむ10の技術

福岡県北九州市立貴船小学校 菊池 省三

スピーチを軌道にのせるには、相手が喜ぶ楽しいスピーチが必要である。今度はどうなお話が出るのだろうかとお聞き手が期待を待つようになればスピーチは成功といえる。

そのためには「楽しく話すスピーチ技術」が大切である。よい話し手を育てる「スピーチを楽しむ10の技術」を紹介する。

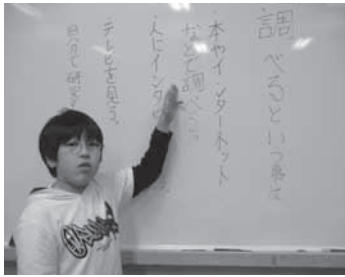
●技術1「メモを使って話す」

メモがあるとスピーチに自信がつく。はじめは文メモ。メモを見ないで言えるようになったら単語メモに変える。メモを作る前に、話す時間感覚を練習させるとよい。

十字3秒、二十字5秒、三十字7秒。

三十字以内でないと聞き手はよく聞いてくれない。だから、文は三十字以内で書く。30秒は4〜6文。1分間では8〜12文。

この時間感覚ができるとスピーチの時間に合ったメモが作れるようになる。



●技術2「実物を使って話す」

「私の好きな人形はこれです。」というように実物を見せて話す技術である。

ふくろの中からゆっくり出して見せるなど見せ方にもアイデアがあるが一番効果的なのは、聞き手が集中するので話し手も自然にメモから離れ表情や身ぶりも出てきて話しこたばになりやすいところである。

●技術3「黒板に書いて話す」

よい聞き手を育てることが、よい話し手が育つスタートである。

黒板に書いて解
説しながら話す
聞き手はよく聞
くようになる。
話し手のほう

も、はじめはメモを片手で時々見たりしているが、だんだんメモを見なくなる。話しながら組み立てられるようにしたいものである。

●技術4「図や表を使って話す」

グループで調べたことを聞き手が興味をもつように図や表にまとめさせる。その図や表を使って分かりやすく話させるのである。

この技術はとても大切である。

これからの社会や学校では、プロジェクトを組んで課題（話題）を見つけ、情報を収集し、プレゼンテーション（企画書）を提出して、企業や学校にその価値を認めさせるスピーチ能力が重要視されているからである。

●技術5「実際にやってみて話す」

実際に「その時」の様子をやってみながら話すということである。

オルガンを実際に弾いて話す。紹介する本の一節を朗読して話すなど応用は広いし、聞

き手の印象は非常に強く、話題はいつまでも残るであろう。

●技術6「アシスタントを使って話す」

「○○さん、チョット手伝ってください。」と指名をして「手を首にこんなふうにまいてください」と指示をして、二人でその時の状況を再現しながら説明する技術である。

アシスタントには感想を聞く。
状況をドキュメントタッチで客観化できる技術である。

●技術7「応答関係を使って話す」

「○○くん、立ってください。○○くんは、○年○組のどんなところが好きですか。」と意見を求めてから自分の考えを話したり、「私はバラの花が好きですが、○○さんはどんな花が好きですか。」と問いかけたり、「みなさん、私の宝物は次の三つのどれだと思いますか。」とクイズを出して話したり、スピーチの終わりに、「○○さん、私のスピーチはどんな内容だったか三つ言ってみてください。」と要点を聞いたりして、話し手と聞き手の間に、質疑応答の関係を作りながらスピーチをする技術である。スピーチは楽しいものだと感得させると同時に友達づくり、学級づくりにも非常に役立つ。

●技術8「数字や名前を入れて話す」

より具体的に話させる技術である。子どもは聞き手をあまり意識していない。自分が分かっていることをただ話せばいいと考えている。これでは聞き手にはイメージ豊かに伝わらない。そこで、

「数字を三つ入れて話しましょう。」
「人や物の名前を三つ入れて話しましょう。」
などと約束を決めて話をさせる。他にも約束を加えると、具体的に楽しい話になってくる。話し手も、自分の伝えたいことを強く意識するようになってくる。

●技術9「ナンバリング・ラベリングを使って話す」

この技術は、話したいことに番号や見出しをつけることである。この技術を身につけることによって、キチンと内容を整理して話すことができるようになってくる。

「みんなに伝えたいことを三つはなします。」
一つ目は、○○ということです。
二つ目は、△△ということです。
三つ目は、□□ということです。

この技術によって、いくつのポイントを話すのか、今はどんな内容を話しているのか、といったことが聞き手にも分かりやすく伝え

ることができるようになってくる。

●技術10「ユーモアを入れて話す」

子ども達は、ユーモアのあるスピーチが好きである。そのために、話題を工夫したい。子ども達にウケがいいのは、自分をネタにした失敗談や秘密の話である。

「こんなバカなことをしました。」
「そつと私の秘密をばらします。」
といった話題だと間違いなくウケる。また、「大人にいいたいこと」というテーマでも教室は笑顔でいっぱいになる。自然と表情、身ぶり手ぶりも出てきて、楽しいスピーチになってくるのである。

スピーチの前に、特定の人を話題にしたり、下品な内容を話したりしないようにクラスの約束を決めておくことも大切である。

●コラム

「礼、姿勢、目線、表情、身ぶり手ぶり」などの話す態度、「声の大きさ、速さ、発音、アクセント、抑揚、口調、間、息づかい」などの声の調子といったスピーチの基本となる技術は、相手意識や目的意識がついてくるとともに育っていくものであるから、速成指導はしないほうがよいようである。

きくち しよつぞう 「コミュニケーション指導を中心に楽しい授業づくりの実践研究を行っている。」

人物の考え方や生き方をとらえよう —「わらぐつのなかの神様」(小学五年)—

静岡県静岡市立南部小学校 泉 真

ゴールを意識して単元に取り組む

この単元で自分たちが付ける力は何なのか、付けたい力は何なのかを明確にし、児童と共通理解をする。私はよく単元の頭にあるリード文を大切に扱う。

登場人物の相互関係を「読むこと」

新学習指導要領では、物語文の【読むこと】の目標は、「①登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、②優れた叙述について自分の考えをまとめることができる」となっている。

①今回の改訂で「相互関係」という言葉が入ったことから、「わらぐつのなかの神様」(注)では、おみつさんの心情、マサエの心情を考えることで終わりではなく、おばあちゃんとマサエのわらぐつに対する考え方の違いを対比させたり、おみつさんの考え方と町の人達の考え方の対比をさせたり、おみつ

さんと大工さんの考え方との共通点を考えさせたりということを意識して授業を行った。この物語で大きく心情が変化するのは、マサエである。初めの場面と結末の場面ではまったく違った考え方をしている。「マサエを変えたものは何だろう」という児童からの疑問を軸に昔がたりの中のおみつさんや大工さんの考え方や生き方に切り込んでいった。

②優れた叙述については、「わらぐつ」や「雪がた」といった小道具、印象的な台詞や態度、色といった暗示的に登場人物の心情を表現している部分に気づかせたいと考えた。例えば「わらぐつ」に象徴されるおみつさんの人柄であるとか、直接的でない表現の「いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくれないか。」という大工さんの台詞である。笑い話ではなく、「うちにきて、わらぐつを作ってく欲しい。」「家族の分まで作ってくれたら嬉しい。」とわらぐつを作るためにうちに来て欲しいと読んでいる児童もいる。

また、現在から入って、登場人物の昔がたりというかたちで話をすすめ、終わりにまた現在と結びつける手法や、また今まで三人称で語られてきた人物が、結末で突然語り手に変化するという手法を構成の巧みさと考え、その手法についてどう考えるかということを児童に発問した。「おばあちゃんが最後まで自分のことだと言わなかったのはどうしてだろう。」といった発問には、「おもしろくないから。」「マサエに興味をもってもらいたかったから。」「自慢話だと思われたいから。」と様々な考えが出てきておもしろかった。



「伝え合う力を育てる」話すこと・聞くこと

本校の研修テーマは「響き合いのある授業」。そのために「伝え合う力を育てる」ことを日々の研修の軸に置いている。今回の学習指導要領改訂でもこの「伝え合う力を育てる」ことは継承されている。話すこと・聞くこととのステップを職員全体で話し合い、児童たちと共通理解をしている。「今、みんなが身に付けていく力はこれだよ。」と教室にも掲示しておいてある。また、互いに伝え合い深め合うために、今回の単元では全体での話し合いの前に四人グループでの話し合いを取り入れた。話し合うことで班の意見をまとめるということではない。自分の意見を価値付けたり、違った価値感、考え方に触れたりする場面を設定することで、より多くの児童に伝え合うための準備段階を作った。また、四人という数字にもこだわっている。脳科学者によると、「人数が多ければ多いほど効率がいいと考えられるのは間違っている」という。人数が



多いと社会的な手抜きを無意識に始めるそう。それが始まるのが五人からという。脳科学の側面から見れば、少人数で話し合う場合、一番適している人数は四人である。実際に、四人だと全体では話さない児童も口を開くようになった。

話すためには「自分の思いや考えをもつ」ことが必要になってくる。基本はノートであると考えているが本単元では書き込みノートを使用し、毎時間その書き込みノートに考えを書かせた。サイドラインを引かせたり、書き込みを加えたりと、考えをもつための時間を確保した。

また話し合うためには、必ず「聞く」ことが必要である。新学習指導要領の指導事項を見ると「自分の意見と比べるなどして考えをまとめる」とある。比べるためにはまず聞かなくてはならない。「目、耳、心で聴くんだよ。」という約束を児童と確認し、特に姿勢を意識させてきた。うなずき、相づち、返事ももちろん大切で、聴くことの大切なスキルであることは話しているが、脳科学の見地からも姿勢が本当に大切である。話し手を見て、姿勢をよくすることを心がけてきた。

考える国語へ

これまでは、文章に書かれている内容、構

成や表現の工夫、考えや意図などを教師が児童に「理解させよう」としてきたことが多いと思う。しかし、これからは単に知る、理解するというだけでなく、この文章に対して自分はどう思うのかといった「考える」ことが求められるのではないかと。本単元でも「結婚を決めたおみつきさんをどう思うか。」という問いを投げかけてみた。当日、力量不足の私の言い回しの違いやそれまでの読み取りから、児童は困惑していた。また、こうした「文章に対してどう思うのか？」という自分の意見を聞かれることに慣れていないため、何を書いたらいいのか戸惑う児童もいた。文章に対して、筆者の意見に対してなど、「自分はどう思うのか」ということには児童にも、教師にとってもこれからの積み重ねが大切であると感じた。

注 「わらぐつのなかの神様」

（『杉みき子選集（1）』新潟日報事業社）

いずみ まこと 静岡県静岡市立南部小学校教諭。本校研修テーマ「響き合う授業」に向け、日々教師修行中。

意欲・関心を高め、活用力を育む古典の授業デザイン

「おくのほそ道」(三年)の実践から

三重県松阪市立殿町中学校 森 喜世子

はじめに

平成二〇年度三重県で開催された「第三四回全日本教育工学研究協議会全国大会」で発表した内容に基づき、「おくのほそ道」(三省堂『現代の国語』三年)の実践を報告する。

一 授業のねらい

新学習指導要領・国語科三年には、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、次のように記されている。

(I)「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

(ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

(イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

これは、本文の読解学習で終わるのではなく、

言語活動を充実させるような単元計画の工夫が求められているといえよう。教科書の「学びの道しるべ」(学習の手引き)には、「『旅』に込められた作者の思いを通して、人間の生き方について考えを深める。」とある。古典は難しいという生徒の抵抗を取りのぞき、古典を豊かに読ませたい。

〈単元の目標〉

○教科書の本文「月日は」「平泉」の読解とともに、「おくのほそ道」すごろくゲームによって他の俳句や旅のエピソードを知り、古典を身近に感じる。

○旅や俳句にかける芭蕉の思いにふれることで、自分の調べたい課題を見つけ、レポートやスピーチを通して芭蕉の人間像に迫る。

二 授業の展開

第一次【読解】：四時間

・古文の朗読と読み取り

第二次【発展】：一時間

・「おくのほそ道」すごろくゲームの実施

第三次【追究】：夏休み及び二時間

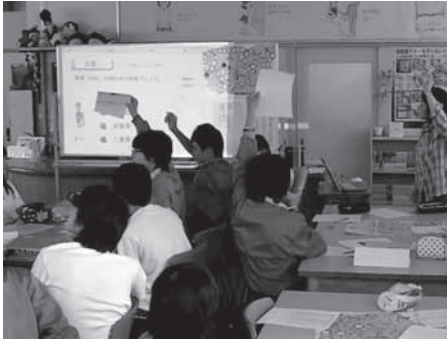
・芭蕉についてのレポートまとめ

・一分間スピーチの実施

(1) 興味・関心を高める教材づくり

「おくのほそ道」俳句すごろくは、みえデジタル教材作成班が開発した自作ソフトで、<http://d-tano.axisz.jp/OH2007/indexK.html>から利用できる。俳句や芭蕉に関連するクイズを解きながら「おくのほそ道」の全行程をたどるすごろくゲームである。動画や写真を通して各地の自然や人との出会いを学べるように工夫した。古文の朗読や現代語訳、俳句入門コラムなども盛り込み、古典や芭蕉への理解を深めることが可能である。

実践のポイントには、アナログとデジタルを組み合わせたゲームで、楽しみながら古典が学べる点である。教科書で学習した旅立ちや「平泉」のマスを使ってゲームのルールを確認した後、班対抗でゴールの大垣をめざし、



【発展】「おくのほそ道」すごろくゲームの授業
スクリーンの3択クイズの解答カードを挙げている。
机上にはすごろく盤とコマがある。

クイズとカードの得点を競う。スクリーンに提示するデジタルな映像画面だけでなく、実際に手にとって動かせるコマやすごろく盤を組み合わせることで、班の仲間と協力して芭蕉の「おくのほそ道」の旅を追体験できる。歌枕カードやアイテムカードを手に入れて大喜びしたり、一回休みのコマに止まってがっかりしたり、夢中になって取り組む姿が見られた。特に、普段授業に集中できない生徒の参加意欲を高めることができた。「画像で見た海と海岸がきれいだったので『種の浜』へ行ってみたいと思った。」「芭蕉は旅を通して様々な景色を見てたくさんを感じたんだと思った。」「『尿前の関』の俳句は、旅のつらさがあらわれていると思った。」という

感想は、各地の自然や俳句に関わるエピソードをクイズ形式の映像や写真で効果的に示せたからである。芭蕉についてさらに学びたいという感想が多く、調べ学習の具体的な課題を設定させることができた。

(2) 「私の芭蕉さん」を交流する手立て

① 調べ学習レポート

参考となる図書やウェブページの一覧表プリントを渡し、夏休みの課題とした。レポートのまとめ方については、次のような雛形プリントを配布した。

I 序論 「おくのほそ道」の学習をするまで、私が芭蕉について知っていたことは、() というようなことでした。
II 本論 そこで、私は芭蕉の() について() で調べてみたのですが、次のようなことがわかりました。()
III 結論 「おくのほそ道」の調べ学習を終えて、芭蕉に対する私の思いをまとめます。()

② 芭蕉さん一分間スピーチ

レポートをもとに、自分が一番伝えたいことを一つにしほって、一分間スピーチを行った。原稿用紙一枚で芭蕉の何を伝えるのか、聞き手も興味津々であった。

【審査基準】①発表の仕方：声の大きさ、話

すスピーチが適当である。②発表の仕方：感情をこめている。伝えようとする意欲が感じられる。③発表の姿勢：姿勢や態度がよい。アイコンタクトなど。④発表の内容：表現の工夫がある。発見や感動がある。納得できる。

三 実践をふりかえって

授業後のアンケート結果をみると、「取り組めた」とどちらかというとり組めた」と回答した生徒は、すごろく九四%、レポート八八%、スピーチ八四%であった。「授業をするまでは名前しか知らなかったけど、芭蕉のイメージに肉がついたというか人間像をつかめた気がする。」という感想のように、多くの生徒にとって、歴史上の偉人から血が通った人間芭蕉へと変わっていったことがわかる。

「わかって楽しい授業」とは、学力面や生活面の課題を抱えた生徒たちが、いきいきと参加し、自信が持てる授業、お互いの良さを認め合い、つながれる授業だと考える。古典の基礎的な知識や朗読技能の習得とともに、活用力を育てるという課題に向けて、生徒の意欲・関心を高める授業デザインを今後とも考えていきたい。

もり きよこ 三重県中学校国語教育研究会幹事。三重県教育工学研究会会員。ICT活用による「わかって楽しい授業づくり」をめざして実践研究を続けている。

国語科書写の評価について 一学年行書指導から考える

東京都北区立滝野川中学校 関根 克洋

書写指導の重要性

書写の時間は、国語科の授業である。至極、当然のことであるが、年間指導計画をもとに、きちんと授業が行われているのであろうか。そういう私も、国語科の必修授業時数が減った時期から、書写指導を充分に行っていないことを、いつも反省している。その反動として、生徒の文字意識に表われていることは、痛いほど感じられる。

近年、パソコンや携帯電話等と関わる時間が多くなったために、手書き文字の習慣が少なくなっていく傾向にある。このような時代だからこそ、さまざまな筆記具を使って書くことや、日常生活における文字に対する意識を高めさせる必要がある。また、正しく整った文字を書くことの大切さ、文字を書くことによって培われる表現力の尊さを、認識させなければならぬ。

そこで、書写の時間は、国語科の基礎・基

本としての「伝統的な言語文化と国語の特質

に関する事項」であることを踏まえて指導したい。例えば、書写と漢字学習や他の書く学習活動との横断学習、意見文を原稿用紙にまとめさせる際の書き方指導、古典や詩、俳句、短歌の学習の際、授業ノートに書写させるなど、国語科学習の文字指導や「書くこと」の指導と関連づけて、指導していくことが必要になってくる。さらに、書写用語（文字の大小、行の中心、配置、字間、空間、余白、基本点画、筆順、部首）を用いた書写指導も、行わなければならない。

このようにして、学んで身につけた書写の能力を、国語科書写の時間だけでなく、国語科の授業はもちろん、他教科や日常生活に役立てていけるように取り組ませたい。

行書指導計画と評価の実際

第一次

【第一時】ねらい…楷書と比較して行書の特

徴を知り、行書学習の意義を知る。

【第二時】ねらい…①楷書と行書の筆使いの違いを知る。②行書の点画の丸みや連続、右払いの変化を理解して書く。

【第三時】ねらい…行書の点画の連続と方向や形の変化を理解して書く。

第二次

【第四時】ねらい…毛筆で学習した行書の特徴を踏まえ、硬筆で書く。

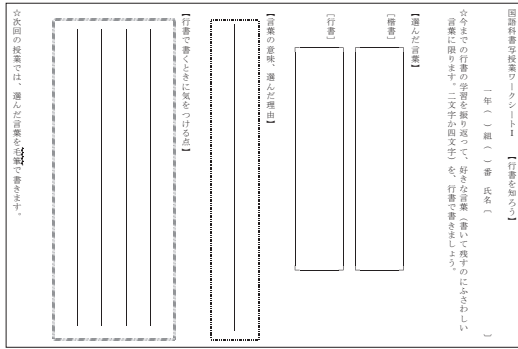
第三次

【第五時】ねらい…今までの行書の学習を踏まえて、気に入った言葉を選んで毛筆で書く。

【第六時】ねらい…行書の学習を生活の中に生かす。

以上のねらいを踏まえて学習し、自己評価をさせる。振り返ることによって、自分の文字に対する意識付けを図る。

さらに、定期考査では、書写に関する問題を作成し「知識・理解」や「技能」を評価している。◆は主な出題項目である。



図Ⅰ：右ページで示した行書指導計画の【第四時】に使用のワークシート。【第五時】【第六時】も同様のワークシートを活用し指導する。

図Ⅱ：一学年「行書に関する指導」の評価計画。評価の基準を、学年状況に応じて示した。

図Ⅱ 「書写に関する指導」評価計画

時	学習活動	具体的評価規準	評価方法	観点別学習状況の評価の基準		
				A	B	Cの生徒への手だて
第一時	行書入門…できるだけ速く書ける場合どうなるかを確かめる。(硬筆) 行書学習の意義を知る。 『空想』の楷書と行書を書いて違いを確認する。(毛筆)	楷書と比較して行書の特徴を聞き、行書学習の意義を理解しようとしているか。 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(2)イ】	●発表 ●観察 ●点検	◎行書はより速く書くのにふさわしい書体であることを理解している。さらに五つの特徴を理解している。	○行書はより速く書くのにふさわしい書体であることを理解している。	・楷書体と比較させ、違いを見つけてさせる。
第二時	横画の筆使いの違いを理解する。(毛筆) 点画の丸みや連続、右払いの方向や形が変化する点画を確かめ『白夜』を書く。(毛筆)	楷書と行書の筆使いの違いを知り、書こうとしているか。 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(2)イ】	●観察 ●点検	◎基本点画について、行書の筆使いを理解して書ける。また、点画の丸みや連続を理解して書いている。	○点画の丸みや連続を理解して書いている。	・「力」「円」といった漢字で、折れのところを角張らないように書かせる。
第三時	点画の連続と方向や形の変化を確かめ、『流星』を書く。(毛筆)	行書の点画の連続と方向や形の変化を理解して書こうとしているか。 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(2)イ】	●観察 ●点検	◎点画の連続と払いやはねの方向や形が変化するものを理解して書ける。連続の原則として、三面の場合、あとの二面が連続することを理解している。	○点画の連続と払いやはねの方向や形が変化するものを理解して書いている。	・連続は次の画、あるいは、次の文字に続いていくことを理解させる。
第四時	書写教科書の硬筆課題について楷書と行書を比較して書く。(硬筆) 好きな言葉を決め、行書で書く。(硬筆)	毛筆で学習した行書の特徴をふまえて、硬筆で書こうとしているか。 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】 【技能】 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(2)イ】	●観察 ●点検 ●評価表 ●定期テスト	◎毛筆で学習した行書の特徴をふまえて、学習したことを応用して丁寧に鉛筆で書写している。 ◎選んだ言葉の意味と理由が明確に書かれている。	○毛筆で学習した行書の特徴をふまえて、丁寧に鉛筆で書写している。	・全課題の中から、主だったものを選んで練習させる。
第五時	行書の特徴のどの点を重点的に練習するかを、目標として設定する。 選んだ言葉で練習する。(毛筆)	選んだ言葉で、これまでの行書の学習をふまえて書こうとしているか。 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】 【技能】 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(2)イ】	●観察 ●点検 ●評価表 ●定期テスト	◎行書の特徴を理解しながら、自分の課題を明確に設定し、選んだ言葉で練習している。そして、その課題を解決している。	○行書の特徴を理解しながら、自分の課題を設定し、選んだ言葉で練習している。	・行書の特徴の一点に絞って練習させ、できるようになったら、次の課題に当たらせる。
第六時	生活の中で使われている行書を探し、行書体で書く。(硬筆) 自分の氏名等を書けるように練習する。(硬筆)	行書の学習を生活の中に生かそうとしているか。 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】 【技能】 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(2)イ】	●観察 ●点検 ●評価表 ●定期テスト	◎生活の中の行書体をはじめ、他の書体を探してきて、それをともに、文字に対する関心を深めようとしている。また、自分の名前等、何も見ないで行書体で書ける。	○生活の中の行書体を探してきている。また、自分の名前等、何も見ないで行書体で書こうと努力している。	・探してきた生徒の行書体を参考資料として示す。これから生活の中で、気をつけてみるよう助言する。

書写指導の課題

- ◆ 書写用具の名称（文房四宝…筆、硯の部分名称）
- ◆ 字形を整えて書く（自分の氏名、課題文字…鉛筆）
- ◆ 基本点画の名称 ◆ 筆順
- ◆ 平仮名の字源 ◆ 平仮名の字形（鉛筆）
- ◆ 行書の特徴 ◆ 字体の違い
- ◆ 字形を整えて書く（自分の氏名、選んだ言葉（行書…鉛筆））
- ◆ 書き初めについて

平成二十四年度全面実施の新中学校学習指導要領では、書写に関する事項を「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」として位置づけている。単なる「言語事項」ではない。我が国の伝統的な文字文化を大切にすること。また、社会生活で役立つ文字文化に対して親しむ態度を育んでいくことが、ますます重要視されるわけである。

今後、書写に関する指導が、他の領域と関連をもたせた指導にしていかなければならない。特に、漢字に関する指導や、「B書くこと」の領域と密接に関わっていくように。けっして毛筆のみの単発的な指導ではない。

せきね かつひろ 自分の手が作り出していく文字。活字が氾濫している時代だからこそ、書き文字の重みを意識させたい。

主題・要旨をとらえるということ

新潟大学
足立 幸子

1 はじめに

PISAの読解力国際専門委員会(reading expert group)の一員として、読解リテラシーの枠組みを検討するという仕事をしたことがある。その時に思ったことは、我が国の国語科教育における「読解力」のとらえ方は、ずいぶん特殊だということだ。具体的に、そのことを指摘したい。

図1は、PISAの二〇〇〇年・二〇〇三年・二〇〇六年調査で用いられた読解リテラシーのアスペクトである。一連の読書過程の中で、読んでいる人の頭には様々なことが生起するわけだが、それぞれのアスペクトは別々に測定可能であると考えるのである。それぞれのアスペクトは、特にどれが難しくどれが易しいということはない。難易度は、個々のテキストや問い方によって変わってくるものであるし、実際には生徒の通過率によって

測られる。これと、我が国の国語科教育における「読解力」とのとらえ方の違いを、ひとつ例を出して比べてみよう。

2 「幅広い一般的な理解の形成」から、主題・要旨をとらえる指導を見直す

注目したいのは、図1の「幅広い一般的な理解の形成」である。これは、「筆者がこの文章で言おうとしていることは何ですか」「この文章の最大の目的は何ですか」というような、テキストの主題や要旨をつかむことができるかを問うものである。これは、「情報の取り出し」や「解釈の展開」や「テキストの内容の熟考・評価」あるいは「テキストの形式の熟考・評価」とは関連させずに、測定できるものとしている。

ところが、従来の国語科授業における主題・要旨の指導は、個々の情報を取り出し、解釈をさせ、丁寧に読み進めていくことで、初め

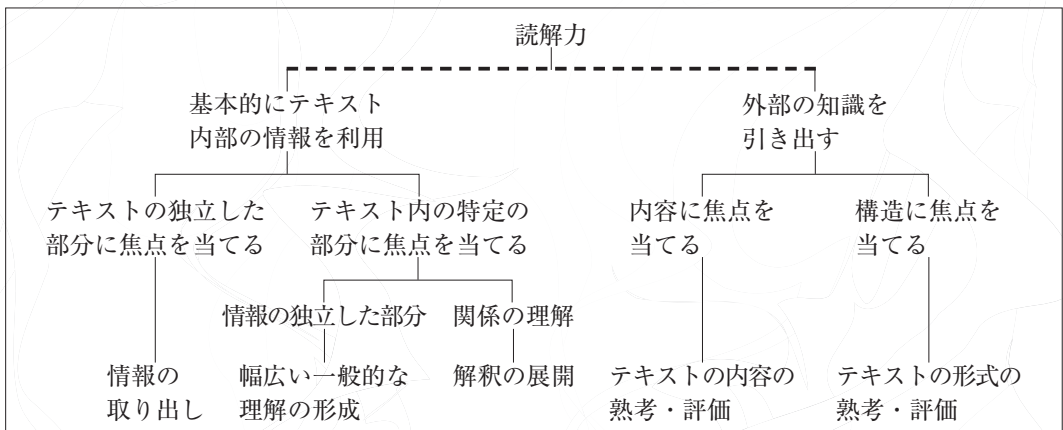


図1 読解リテラシーのアスペクト

(国立教育政策研究所監訳『PISA2006年調査 評価の枠組み OECD生徒の学習到達度調査』ぎょうせい 2007年 p.44より)

て主題が分かってくるという前提で行われることが多かった。実際の授業では、場面・段落ごとに大事なキーワードを押さえたり、大意をまとめたり、見出しを付けたりして、数時間を過ごした後、やっと主題・要旨をとらえる授業に入るのだ。これは、我が国の国語教師の①主題・要旨の前提には細かい情報が読めていなければならない、②主題・要旨は難しく、情報の取り出し・解釈は易しいという読解力観に基づいている。それぞれのアスペクトは個々に測定可能で、難易度はアスペクトによらないとするPISAの読解リテラシーとは、異なるのである。そして、実際のところ、このような長時間をかけての主題指導にたどりついた頃には、教材文に対して飽きを感じたり、疲弊してしまったりする子どももいる。主題・要旨をとらえるのに重要なことは、そういう個々を踏まえることではなく、むしろ大観することであり、大観することとは決して難しいことではないということ、私たちはPISAの読解リテラシーから学ぶべきではないか。

3 読書指導で、「幅広い一般的な理解の形成」の力を高める

このような我が国の教師が持っている読解力観は、短いテキストを長時間かけて読むと

いう我が国の国語科授業から生みだされたものである。そうであるとするならば、逆に、長いテキストを短い時間で読むという場面を授業の中に作り出せば、大観して「幅広い一般的な理解の形成」を行う力は自然に身につけられるはずなのだ。そこで、私が「短時間読書」「点検読書」と呼んでいる読書指導の方法を、ここで紹介してみたい。

「短時間読書」は、たとえば七分間など時間を決めて、その時間内に筆者が言おうとしていることは何か、その本が書かれた目的は何かを読みとらせるという読書指導の方法である。二人組みで、読んだことのない別々の本を読ませる。七分経ったのち、読みとった主題・要旨を相手に話させるのである。白い紙を一枚渡しておき、メモはとつてもよいこととするが、決して主題や要旨を紙に書いてはいけない。そうすると時間がかかってしまうからである。短い時間を最大限に生かして本を大観するという経験を積ませることが、この指導法で最も重要な点である。

「点検読書」は、アドラーの『本を読む本』に書かれている「点検読書」から発想を得て、私が主に大学のゼミの中で行っている読書指導法である。まず学生に読む目的（読みたいこと）を決めさせる。そして、その本を点検させて、自分の目的から考えればその本をこ

れから時間をかけて読む価値があるかどうかを判断させるのである。私はこれを卒業研究の指導で用いているが、中学生でも十分に使用できる。何か読みたいことや知りたいことを先に決めさせ、そのことが中に書かれている読んだり引用したりする価値があるかどうかを点検させればいいのである。このように、短い時間で、長めのテキストを大観するという経験を積ませる必要がある。

4 おわりに

以上、PISAの読解リテラシーをもとに、主題・要旨をとらえるということについて、我が国の読解力観を検討してみた。「短時間読書」も「点検読書」も、多読をベースにした教育が実施され、読解リテラシーで高得点をあげている国々では、普通に行われている指導であると想像する。これからもこの連載で、PISAを鏡として我々の読解力観や読書指導を問い直し、読解リテラシーをつける読書指導の方法を、紹介してみたい。

あだち さちこ 新潟大学教育学部准教授。PISA 2009読解リテラシー国際専門委員会委員。読書の指導法、評価の研究を行っている。

子どもの変化に 即応した新しさを — 第四版改訂作業から

【三省堂例解小学国語辞典】編集委員 近藤 章

今回の辞書



三省堂 例解小学国語辞典 第四版
三省堂 / 2008年

小学生向けにつくられた最初の本格的な国語辞典のはじまりは、「三省堂小学校国語辞典」(一九五九)であった。かけ出しの小学校教師だったころ、私もこの辞典に、ずいぶん助けられた。

これを受け継いで生まれたのが、現在刊行されている「三省堂例解小学国語辞典」(一九九七初版)である。

この「例解」は、前身が国語辞典の小学生版であるのに比べて、内容が一新され、いわば学習のための辞典となった。たとえば、人名・地名・専門用語などのいわゆる百科項目や、数多くの学習コラムが、新たに取り入れられたりしている。

以来これが版を重ねて、このたび第四版が刊行された。その改訂の一端を記してみたい。

一 総ルビと持ちやすい重さに

今回の改訂作業の一つは、これは今回だけの特別な事情であるが、全文総ルビに切り替えることであった。このところの辞書利用の低学年化に、対応するためである。

ルビを付けるには、今よりも行間を広げなければならぬ。これは当然、ページ増となる。が、子どもが使う辞典でもあり、むやみな厚さにはできない。このため、今回はとりわけ、内容のスリム化を視野に入れながらの改訂作業となった。

なお、内容の改訂だけでなく、一冊の重さを減らす努力もした。子ども用の学習辞典である。気軽に持ち運べる、使いやすい重さにしたい。そのため、幾度も紙質を検討し、総ページはそのまま、類書中いちばん手に取りやすい重さにすることができた。

二 変化に応じた新たな項目を

改訂の主たる目的は、子どもの言語環境や学習内容の変化に応じた内容の再検討、とくに新項目の採択・補充である。

小学校全教科の教科書、よく読まれている読み物や雑誌などの調査から始まって、子どもたちの言語生活の、想定される変化を視野に、新項目の選定を進めた。

① 情報関係の変化から

情報通信環境が、目まぐるしく変化している。それに伴って、後掲のような語が、子どもたちの語彙になりつつあると考えられた。旧版でも、この面には十分配慮してあったが、それでもこの変化には対応できていない。目配せを怠ると、「デジタル放送」など、数年後にはわざわざ断る必要がなくなつて、削除すべき語になるかも知れないのである。

IT・ID・ウェブサイト(サイト)・スキャナー・デジタル放送・デスクトップ・光ファイバー・ブログ:

②教科書の内容の変化から

教科書の、度々の改訂も見逃せない。

国語科の特に説明文教材や、社会科・理科などの教科書から、新項目候補が浮かび上がり、取捨選択に頭を悩ました。その中で、使用頻度、使用範囲から考えて、次のような語を立項することにした。

エコ(エコロジー)・SGマーク・介助犬・学芸員・化石燃料・縄文杉・食育・租庸調・聴導犬・デイスービス・ハザードマップ・ピオトープ・ペープサート・道の駅：

③言語環境の変化から

テレビ一つを考えても、そのときそのときに、目新しい語が行き交っている。いわゆる時事用語である。これらは、子どもにとつては新語であり、辞書に当たって調べることも想定される。それに応える用意もしておかなければならない。

そこで、次のような語を立項した。
AD・NPO・個人情報・自給率・少子化・認知症・熱中症・バイオ・ハローワーク・PKO・非核・ブランド・無添加・メタボ・リーズナブル・レトロ：

④子どもの遊びの変化から

子どもたちの遊びや趣味、好きなスポーツの変化にも、配慮が必要である。

例をあげると、旧版を検討して目についた

のが、野球関係の語彙の多いことであった。かつてはそれが実態に即していたであろうが、子どもたちの好みの多様化を考えると、いささか偏していると考えられた。

そんな観点から、追加や訂正をした項目もある。

アウエー・エリア・カーリング・タイムスリップ・時計回り・パワフル・ボード：

⑤再度の見直しの中から

初版の項目選定の際、小学校用としては必要なしとして採らなかつた語が、読み物や教科書にしばしば使われていたりする。テレビ番組などでは、難しい漢語や四字熟語がとりあげられたりしている。

それらを勘案して見直すと、追加すべき語がいくつか出てきた。次は、その例である。

一期一会・落ち込む・禍根・活性化・喜色満面・興味津々・甲乙つけがたい・荒唐無稽・桃源郷・封印・抱腹絶倒：

限られた紙数である。新項目を追加するばかりでは、紙数をオーバーしてしまう。一方で、項目削除が欠かせない。

もともと適切と判断して採録してある項目である。削るのは易しいことではない。子どもの言語環境の変化を斟酌しながら、思い

切って、削除項目を取り出すこととなった。

削除したのは、次のようなものである。

①子どもの生活から遠いと考えられる語
愛育・栄進・炎々・恩給・金的・破廉恥・フラン・弁じる・望外・奉職：

②別の言い方に代わつたと考えられる語
石綿・海水中・学課・銀幕・金剛石・産婆・奏楽・奏鳴曲・天然色・友軍：

③消えつつあると考えられる語
脚絆・膏葉・謄写版・DPE・デノミネーション・ビニロン・ボジ・麦焦がし：

このほか、前回の改訂以後に、国立公園、省庁名、市町村名、郵政制度等の変更があつた。その削除訂正も行った。いわゆる百科項目は変更が間々あり、要注意である。

紙数の制約のなか、やむなく立項を見送つた語や、削除に迷いの残つた語がたくさんある。いまは、今回の取捨選択が適切であつたことを祈るのみである。

こんどう あきら 一九三三年、名古屋生まれ。

小中学校・市教委を経て、名古屋芸術大教授で退職。同大名誉教授。第一版から当該国語辞典編集委員。

和力 話力 第1回 輪力



ユーモアは、相手の肯定、人間の肯定

前群馬大学教授 高橋 俊三

子どもたちはすぐ笑う。笑うのが好きだ。
例えば、次の場面。何かの理由で、10人以上の挙手を数える場合、教師が、「では数えるよー。ワン、トゥー、スリー、……テン、じゅういち、じゅうに、じゅうさん、じゅうし、……」とやれば、必ずどっと笑いが来る。

また、これとは逆に、「では数えるよー。いち、にい、さん、しい、……じゅう、化ブン、トエルブ、サティーン、……」とやれば、同じく、笑いが起こる。しかし、両者のその笑いは微妙に異なる。

いわば、前者がユーモア、後者がウィット。笑いは、「変化の中にある不本意的なもの」と言ったのはペルクソン。予想外の予期せぬ変化、しかも突然の変化が笑いを誘う。

英語の数え方が突然日本語に変わる。日本語の数え方が突然英語に変わる。予想を覆されるところに、笑いが生まれる。

でも、前者の反予想は、聞き手にとって安堵に落ち着く。「なあんだ、先生は、11以上は英語を知らないんだ。ぼくと同じだ。」「なあんだ、先生知らないんだ。私、知ってるよ。」と、同等の立場に降りていくか、もっと、それ以下の立場に降りるか、いずれにしても、聞き手は、話し手と同位ないしは優位に立ち、安心して笑う。

ところが、後者は、予想を覆されるのは、

同じだが、話し手にステップを1段階上げられてしまう。「お前ら、知ってるか。」「言えるか。」の挑戦に受けとめられかねない。聞き手は「なんだよ、知ったかぶって。」の反応となりかねない。

ユーモアは、同じ地平で、人間的な共感の笑いをいう。ウィットは、知的な笑いであり、時に人を切ることもある。ウィットもよいが、教室の子どもたちを救い、明るくするユーモアを考えよう。

ユーモアは、その場を明るくし、人と人との和を結び、その和の協力によって、新しい事と物とを創造する力を発揮する。

落語家が、本題に入る前の枕を振る段階で、自分を卑下したり、聞き手を煽てたりするのは、この地平の問題だ。何も、教師は卑下することはないが、偉ぶる必要もない。

「いやー、俊ちゃん、君がいてくれたかー。よかった。頼まれてよー」か。「えーと、誰かいないかなあ。うーん、俊ちゃんだけか。じゃあ、頼まれてよ」か。

ユーモアは、相手の存在を肯定する、人間的な、温かい笑いをいうのだ。

たかはし しゅんぞう 前群馬大学教授。ILEC言語教育文化研究所常務理事。NHKテレビ「話し方教室」「朗読入門」など企画出演。現在、「猫また」の45分授業で、小学生の笑いを呼ぶ授業に凝っている。

近刊のご案内

コンサイス アルバムディクショナリー

2009年2月 4点同時刊行! 各1,575円(予)
四六変ヨコ/48ページ

貼る

四字熟語辞典編【一期一会】



*レイアウトイメージ
右ページが辞書、左ページが写真
真を貼るスペースになつていま
す。L判の写真がタテ・ヨコど
ちらでも貼れます。

お気に入りの写真が辞書になる!
学校で、職場で、家庭で、みんなで楽しめる!
表現の世界、ことばの世界が、
グンと、身近に!

写真×辞書

新明解国語辞典編
【しろ版】

「友情」「ロマン」「青春」「運命
共同体」など22語を収録。



新明解国語辞典編
【くる版】

「悪魔」「暴れん坊」「サスペンス」
「まがい物」など22語を収録。



四字熟語辞典編
【一期一会】

「威風堂堂」「完全無欠」「相思
相愛」などの22語を収録。



年中行事辞典編
【いちねん】

「お正月」「夏休み」「運動会」
「クリスマス」などを収録。



〔印刷所〕

泰成印刷株式会社
東京都墨田区両国三丁目二二

〔発行所〕

株式会社 三省堂
〒100-8137

東京都千代田区三崎町二丁目二一四

TEL 03(3233)9427(編集)

振替 東京 001605543300

泰成印刷株式会社

三省堂
国語教育
1111の字び
第18号

二〇〇九年二月一日発行

定価 一〇〇円(本体九六円)

編集・発行人 八幡 統厚

編集後記

平成20年春に告示された新しい学習指導要領でも「基礎的・基本的な知識・技能の『習得』、これらを『活用』して課題を解決するための思考力、判断力、表現力等の育成」が改めて示されました。今回はこの『習得』と『活用』をキーワードに、学校での学びについて国語科を越えた視点からの考察を試みました。国語科から他教科へ、他教科から国語科へ、学びをつないでいくための取り組みは今後も注目されていきそうです。

18号より表紙・デザインを一新し、二本の連載コラムをスタートいたしました。「読解リテラシーと読書指導」、そして「話し力・和力・輪力」です。ご意見・ご感想は編集部までお寄せください。(S)



三省堂 例解小学国語辞典 第四版

田近洵一 編 | 1,995円(税込) / B6判 / ISBN978-4-385-13821-3
[ワイド版] 2,205円(税込) / A5判 / ISBN978-4-385-13822-0

- ▶すべての漢字にふりがな付きで、1年生から使える。
- ▶新開発の用紙で、20%の軽量化を実現。
- ▶類書中最軽量で、最大級の33,000語を収録。
- ▶豊富な用例・図版や例解コラムに加え、特設コラムをさらに充実。
- ▶地名・人名も取り上げ、他教科の学習にも活用できる。
- ▶常用漢字をすべて収録、くわしく解説。付録に、イラストで楽しむ「くらしの中の英語」ポスター。
- ▶2色刷。文字が大きいワイド版も同時刊行。



三省堂 例解小学漢字辞典 第三版

林 四郎(主幹), 大村はま 編

1,995円(税込) / B6判 / ISBN978-4-385-13817-6
[ワイド版] 2,205円(税込) / A5判 / ISBN978-4-385-13818-3

新装版

- ▶新開発の用紙で20%の軽量化を実現。
- ▶類書中最軽量で、最大の3,000字を収録。
- ▶最新人名用漢字983字にも対応。常用漢字は筆順を明示。
- ▶漢字の字義ごとに熟語を分類する画期的方式で漢字の意味の広がり把握。
- ▶豊富な[例][表現]欄、充実したコラム、多彩な付録。
- ▶さくいんとしても使える「小学校で学ぶ漢字一覧表」ポスター・「漢字辞典引き方ガイド」シートの二大特別付録つき。
- ▶2色刷。文字が大きいワイド版も同時刊行。

生きてはたらく ことばの力を育てる カリキュラムの創造



神奈川県川崎市立中原小学校 編

1,995円(税込) / B5判 / ISBN978-4-385-36399-8

各教科等における言語活動の充実を目指して新学習指導要領に対応。各教科等を通して言語活動を充実させる取り組みと、クロスカリキュラムを取り入れた言語活動の考え方をふまえた研究の集大成。

学校を元気にする 50のルール

尾木直樹 著



1,680円(税込) / 四六判 / ISBN978-4-385-36341-7

今こそ、教師の出番です。がんばれ先生！「ダメ教師！」「モンスターペアレント！」教師・親のバッシングから真の教育改革は生まれない。お父さん、お母さんにも必読の書。

詳しくはwebサイトをご覧ください → <http://www.sanseido.co.jp/>

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--